

棚田学会通信

第69号 目次 2023年6月20日発行

韓国農漁村遺産学会との交流	2
韓国慶尚南道の棚田見学報告	3
つなぐ棚田遺産の特徴	5
農地は集落の絆	6
2025年農林業センサスにおける農業集落調査廃止問題と棚田学会の対応	7
事務局ニュース	8



黄梅谷村^{注1}の棚田（韓国慶尚南道山清郡車黄面）

黄梅山の裾に広がる雄大な棚田（農地面積約700ha）。棚田での稲作の他、棚田を転用した果樹や野菜類のハウス栽培も増加の傾向にある。近年は、棚田や農村の魅力に惹かれ、農のある暮らしを求めて、移住する都市住民も多い。

注1 黄梅谷は韓国語で「ツツジの花の咲く所」を意味するが、現在は村の名前にしか残っていない。

高橋の棚田
（山形県尾花沢市）

宮城県との県境にある翁山の麓の集落に約15haの棚田が広がっている。耕作放棄地の増加や高齢化をうけて、集落全体で農地の保全に取り組んでいる。近年、やまがたの棚田20選やつなぐ棚田遺産に選定され、関心が高まってきている。また、棚田米のブランド化を促進させ、ふるさと納税の返礼品として、高い人気を得ている。



本通信では、2022年10月の韓国農漁村遺産学会との交流および韓国の棚田の見学の報告をし、また2022年に農林水産省より新たに発表された「つなぐ棚田遺産」で選定された271の棚田から見える概要についてまとめ、新たに選定された棚田として「高橋の棚田」（山形県尾花沢市）を紹介する。最後に、農林業センサスの農業集落調査廃止問題での棚田学会からの対応について報告する。
（棚田学会編集委員会）